和の履歴書

司憲 庵久栄

㉖

デザイン博覧会

インダストリアル・デザインを日本の土壌にしっかりと根づかせることが、私の人生後半の課題となった。

昭和五十六年（一九八一年）、大阪の国際デザイン交流協会の設立に参加、私は理事になった。主な事業は、なくなった毎日コンペに代わる国際的コンペと国際デザインフェスティバルの実施である。開催は二年に一回。今では世界でもトップレベルの国際コンペになった。

名古屋市から前に京都で開催したような世界デザイン会議の誘致を依頼された。発端は、中日新聞の学芸部記者の小山太郎さんと市の成田隆雄総務局主幹の来訪だった。

六十年に国際インダストリアルデザイン団体協議会（ICSID）総会がワシントンで開かれ、この場で名古屋が正式に名乗りを上げた。ところが、東欧から初めてユーゴスラビア（当時）が対抗馬として立候補した。

心配して会長経験者であるソ連のユーリー・ソロビエフに相談した。彼は「東側の国が、なんでユーゴスラビアに行きたいと思う？　票は全部名古屋にいく」と言った。言葉通り東側は名古屋支持で、名古屋が僅差で勝った。

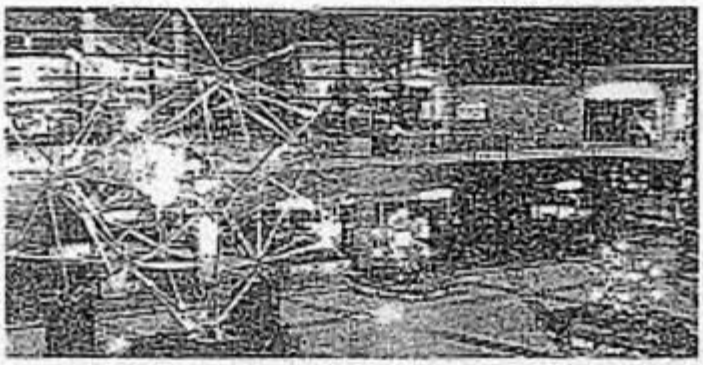
六十三年、会議開催を目指す運営組織の顧問になった。名古屋はオリンピックの誘致に失敗したり、何かしなければいけないとの危機感があった。私は市の関係者に、地方でデザインをアイデンティティーとして打ち出している自治体はないから、名古屋が「デザイン都市」を宣言すべきだと進言。国際会議誘致、国主導のデザインイヤー、世界デザイン博覧会開催を三本柱とするシナリオを描いた。

名古屋発 創造の世界

1500万人来場、特色ある街へ

名古屋市議会は平成元年（一九八九年）六月、デザイン都市宣言を発表、世界デザイン博覧会が七月から十一月まで開催された。十月にICSID総会・世界デザイン会議を相乗りする形で開いた。デザイン博は会期中、千五百万人以上が来場した。私が総合プロデューサーを務めた。

博覧会は「ひと、夢、デザイン」をメーンテーマにデザイン曼陀羅のような世界が出現した。呼び物として米国から無着陸世界一周飛行の「ヴォイジャー」、ソ連から宇宙船「ミール」を持ってきた。設立間もないGKテックが正面玄関に、「シンフォニック・オブジェ」という柔らかい構造の多面体を制作し評判を呼んだ。近づいてくる人の動きに、生き物のように反応して動く。いわばモノと心を近づけたもので、デザインの範囲の広がりを見せた。



GKテックの「シンフォニック・オブジェ」

私は「創造工房」というパビリオンで、「レオナルド・ダ・ヴィンチと千利休」を題材にした。日本の文化のあり方を代表する利休を世界的にしたいと思い、ダ・ヴィンチと比較したのだ。ただ、私の主張は、だれでも天才になれるということで、「ものを愛の目で見よう」などと「創造の十二章」を提案した。

デザイン博が終わり、私は名古屋に国際デザインセンターの設置を提案、第三セクター方式で四年後に完成した。デザイン博物館や通年行われるイベントで、デザインは市民に近くなった。おかげでデザインは名古屋に定着、企業も活性化し、芸術関係の大学も増えている。名古屋はまさにデザイン都市となった。

（インダストリアル・デザイナー）